

産業構造審議会 教育イノベーション小委員会 中間とりまとめ 主要な論点（案）

- 2020 年度に一人一台端末が整ったことを前提に、「学びの自律化・個別最適化」「学びの探究化・STEAM 化」を実現するための方策・課題について実証事業等を通じて得られた知見を提言としてとりまとめた。

「時間・空間」の組合せ自由度向上

- ① **小中学校：「クラス単位の授業時数管理」から「個別学習計画に基づく学び」へ**
主体性・自律性を育み、誰一人取り残さない観点から、クラス単位で厳密に「授業時数管理」を行う考えを超えて、EdTech 等も活用しながら「個別学習計画」を策定・更新し続けて学び、その成果を確認し、細やかに学習支援する考えを積極的に取り入れるべき。
- ② **高等学校：一人一台端末環境を前提とした新たな高校での学びの可能性／少子化を踏まえた小規模校でのオンライン積極活用**
少子化の影響で今後増大する小規模校では、教員の数も少なく、多様な専門性を持つ教員配置は困難。充実した学びの機会を提供するため、「対面」原則の緩和（遠隔授業時の受信側の教員配置の見直し、オンデマンド教材等を活用した学びの際の教員配置の見直し等）が重要。
- ③ **多様な学びの場の選択肢の拡大**
特に不登校の児童・生徒が増加しているなか、子どもたちの学習権を保障するためには、対面・デジタルを自在に組み合わせながら、学びの「場の選択肢を拡充」することが重要。
- ④ **好奇心・探究心に応える「サード・プレイス」の拡充**
子どもの好奇心・探究心を伸ばす学校外の学びの場（サード・プレイス）も重要。 オンラインや民間資金等を組み合わせることで、住む場所や家庭の経済力に左右されることなくアクセスできる環境づくりが重要。

「教材」の組合せ自由度向上

- ① **多様な EdTech 教材を活用した学習環境下における教育データの利活用の推進**
「教育データ利活用ロードマップ」の具体化・実装に向け、データ利活用のユースケースを創出。特に、各生徒が多様な EdTech 教材を学校内外で用いる状況下において、EdTech 事業者が持つ情報についてどの範囲まで標準化すべきか等、各地域の実情に応じた実証を実施。
- ② **探究的な学びの支援：STEAM ライブラリーの整備・普及と評価手法の開発**
全国の学校が探究に取り組みやすいよう、企業や大学・研究機関とともに開発した「STEAM ライブラリー」を活用し、学際的な探究の活動の普及に向けて、多様な実践事例を創出。

③ 探究（横割り）と教科（縦割り）の学習指導要領コード等での紐付け

学習指導要領の全ての項目に付与された学習指導要領コードを、STEAM ライブラリー上のコンテンツ等に付与。探究の内容が指導要領上どこに位置づけられるか明確にするほか、各単元に興味を持った生徒が関連するコンテンツを見つけることも容易になる環境を整備。

「コーチ」の組合せ自由度向上

① 「多様な伴走者」の学校参画促進（大学生 TA や多様な企業人・研究者等）

学びが変容する中で、あらゆる仕事を教員が行うことは困難。子どもの個別最適な学び、探究的な学びを教員の指揮下でサポートする多様な「子どもの伴走者」を充実すべき。

② 「多様な経歴の教員」が増える教員免許制度の実現

多様な人材が「教員」として学校に参画しやすくするため、資質や専門性を評価する手段を多様化すべき。①普通免許状における「資格認定試験」の対象拡充、②抑制的に設計されている特別免許状の授与の仕組み等の見直しが必要。

「出口」の再デザイン

● 高卒就職市場の多様化／高校・大学の入学者選抜の多様化

「未来社会の創り手」を育てるため、「入試」や「就職活動」で評価される資質・能力が変わることも重要であり、入試や就職活動の一体的な見直しが重要。

「学校の「生まれ変わり」の土台づくり

① 「教員間の対話を通じた信頼性の高い組織への改変

学校の学びを変革する上では教員間の対話が活発で、信頼性の高い環境づくりが不可欠。ルールメイキング（校則見直し）プロジェクトや学校 BPR（働き方の見直し）プロジェクトを通じ、教職員間の対話を促し、学校を風通しの良い、信頼性の高い組織に変えていくことが重要。

② 「眠れる財源・資源」の活用－発想の転換－

今後、多様な学びを支える環境を維持・発展させるためには、EdTech 教材の導入をはじめとする様々な費用が必要。この費用を捻出するため、①現状の教材費の使途見直し、②学校に必要な施設の見直し、③広告活用による収入の創出 等の検討が必要。

③ 「地域拠点」としての学校インフラの活用－全世代型の学び・生活・仕事拠点化－

校舎の老朽化・建て替えが今後進展。学校で多様な学びを実現するために、学校を地域住民の生涯の「学び・生活・仕事のインフラ」として生まれ変わるために様々な施設と一体となった施設として再デザインを行う発想が必要。